

【論文】

戦時下のラジオドラマの内容分析

—キーワードの相互関係に注目して—

早 川 治 子

A Content Analysis of Radio Dramas during the Second World War — Correlative Views of Key Words —

HAYAKAWA, Haruko

要旨：戦時下のラジオドラマの台本を電子化資料ⁱとし、内容分析をするために「戦争キーワード」という語彙群を設定した。それらの相互関係を分析することにより、強化しあいながらプロパガンダ効果を及ぼすやわらかい「戦争キーワード」の有り様を明らかにする。
キーワード：キーワード，共起，プロパガンダ，関連性，日常語

1. はじめに

戦時下のラジオドラマはプロパガンダの道具として有効なものであった。そのプロパガンダ性は表面上はやわらかいだけに大変巧妙であった。例えば以下のラジオドラマ「翼」ⁱⁱのクライマックス場面の暁子のせりふを見ても明らかである。

例1. 暁子：＜独白＞国民の一人として、あの方に、——いゝえ、あの方だけじゃないわ。御国の為に一命を擲って戦っていらっしゃるすべての方に対して、御無事をお祈りする気持は、あたし

何時迄も変りはないわ。そうよ、この戦争に日本がきつと勝つその日まで。 <翼2>ⁱⁱⁱ

「国民の一人として」、「御国の為に」、「日本がきつと勝つ」——このような素朴な善意に満ちた言説が、クライマックス場面で、女性の声で、しかも独白としてラジオから流されることにより、お茶の間でラジオに耳を澄ます人々は抵抗感なくこのやわらかなプロパガンダに巻き込まれていった^{iv}。早川（2004）は戦時下のラジオドラマのこのような巧妙性について、ジャンル、ドラマ構成、話者の面から論じた。

早川（2004）に基づき、本稿では「戦争キーワード」^vのそれぞれのつながりに注目し、それが相互に影響しあって意味の上でプロパガンダ性を強化しあう有り様を明らかにしたい。

例えば以下は「六号潜水艇」における花見の解説部分である。

例2. 解説：桜は今や満開、春色怡蕩として快い日本晴れであった。

<六号潜水艇>

以下も「鎮魂歌」における主人公山辺が久しぶりに日本に帰国する際のせりふである。

例3. 山辺：考えれば何処で見たものでもなく、たゞ三年振りに見る日本の景色だったのです。 <鎮魂歌>

ここにおける「日本」の使用は表面上は単純な自国に対する描写である。しかし、言葉の意味はその時代時代で異なり、戦時下においては一国を表す言葉「日本」はそれなりのプロパガンダ性を持って使用されていたと考えられる。本稿ではラジオドラマ中で「戦争キーワード」の共起関係^{vi}を見ることにより、それぞれの「戦争キーワード」が関連しあう様相を分析

戦時下のラジオドラマの内容分析—キーワードの相互関係に注目して—

し、その意味を探りたい。

2. 資料と手順

2-1. 資料について

NHKのラジオドラマの台本作家として戦中・戦後に活躍した小林勝（まさる）作成の台本を電子化資料としたもののうち、戦中（1937年から1945年）のもの27冊分を対象とした。データは句点の切れ目ごとに1発話として記録され、総発話数は12,826である。

このデータに基づいた共同研究は『戦時中の話しことば ラジオドラマの台本から』として既に出版されている。筆者はこの本の第7章「戦争キーワード」から見る戦時中のラジオドラマ」において日常的な「戦争キーワード」使用のやわらかなプロパガンダ効果について論じた。

2-2. 「戦争キーワード」の設定

まず「戦争キーワード」というものを設定した。この設定には先行研究である竹山の「キーシンボル」（ラジオ講演に使われている語句やスローガン）を参考にした。竹山の意味する「キーシンボル」とは天皇に関する様々な語彙および「挙国一致」のような戦争スローガンであり、プロパガンダ性の強い表現である。筆者はこれに竹山では省かれていた「日本」、「わが」、それに「命」、「死」、「国」、「世界」といった、表面上それほどプロパガンダ性が強く感じられない＝「やわらかい」語彙をも加えた。また天皇を直接指す「戦争キーワード」以外はできる限り形態素レベルでまとめた。例えば「聖旨」、「聖慮」は「聖-」とし、また「愛国」、「国家」は「-国-」のようにした。

2-3. 「戦争キーワード」の数え方

「戦争キーワード」の数え方はある「戦争キーワード」が一度出れば—

件と数えた。同一発話内に同じ「戦争キーワード」が2度出た場合も2件と数えた。例えば例1（既出であるが再度ここに載せる）において

例1. 暁子：〈独白〉国民の一人として、あの方に、——いゝえ、あの方だけじゃないわ。御国の為に一命を擲って戦っていらっしやるすべての方に対して、御無事をお祈りする気持は、あたし何時迄も変りはないわ。そうよ、この戦争に日本がきつと勝つその日まで。 <翼2>

「-国-」は2回出ているため2件と数えた。つまり延べ出現単語数である。異なり単語数・単語種別と紛らわしい「語数」という表現は避けた。

「戦争キーワード」のうち天皇に関するものは数が少ないため現れたものすべてを対象としたが、それ以外は5件以上表れたもののみを扱った。

3. 「戦争キーワード」群の区分から見えてくるもの

「戦争キーワード」がラジオドラマのなかでどのような傾向を持って使用されていたかを見るためにまず「戦争キーワード」を①「天皇」に関するもの、②「精神性」を強調するもの、③「死」に関するもの、④自・他の対立を表すもの（例えば「自国」である「日本」と他者として対立する「世界」）の4群に分けた。①群はプロパガンダ性が明確であり、②、③、④となるにつれて、そのプロパガンダ性は表面上はやわらかくなる。

表1を見るとラジオドラマにはラジオ講演によく使用されると竹山が指摘した「天皇」に関する「キーシンボル」はそれほど多用されない。5件未満のものも拾ったにもかかわらず、①の総計は65件である。そのかわり②の精神性を強調するキーワードが172件、③の死に関するキーワードが185件と多く表れる。とくに④群の自・他の対立を表す「日本」、「国」、「我」、「世界」というプロパガンダ性の低い語が545件と数多く現れる。④群の

表1 ラジオドラマ「戦争キーワード」群別表

	キーワード	件数
① 天皇に関する語群	天皇	4
	陛下	12
	大君	8
	上御一人	2
	御稜威	3
	宸襟	4
	大御心	1
	国体	2
	勅-	2
	聖-	5
	-皇-	18
	-詔-	4
小計	65	
② 精神性を強調する語群	-忠-	15
	-恩-	8
	-臣-	5
	恥	13
	名誉	11
	-武-	37
	-勇-	24
	勝	26
	魂	12
	精神	21
	小計	172
③ 死に関する語群	死	134
	命	31
	運命	5
	覚悟	15
	小計	185
④ 自・他を表す語群	-国-	107
	日本	182
	我-	87
	敵	132
	世界	37
	小計	545
合計	967	

キーワードは日常的に使用されやすいものであるから使用件数が多くなるとも言える。つまり、それぞれの語のプロパガンダ性は低くとも、日常的に何回も使用されることにより、深いプロパガンダ効果を及ぼした。しかも、これらの「戦争キーワード」群は後述するように「日本」、「国」、「我」を単純に指示するのみならず、他の「戦争キーワード」と深く関連しあい、依存しあいながら、プロパガンダ性を強化して使用されているのである。

4. 「共起」

ここでは前述の分析を踏まえた上で「戦争キーワード」が相互に関連しあいながら、深いプロパガンダ効

果をもたらす様子をキーワード相互の「共起」関係を手がかりに見る。

4-1. 「共起率」

本稿で「共起」とは、ある語が他の語と同一発話内に出たことをいう。

まずある「戦争キーワード」が他の「戦争キーワード」と同一発話中に出現した件数を数えた。

この結果を集計し、あるキーワードの出現数を母集団とし、それと共起

表2 「戦争キーワード」共起率表

	キーワード	件数	共起関連語件数	関連語数/件数
① 天皇に関する語群	天皇	4	2	50%
	陛下	12	6	50%
	大君	8	4	50%
	上御一人	2	7	350%
	御稜威	3	6	200%
	宸襟	4	7	175%
	大御心	1	0	0%
	国体	2	3	150%
	勅-	2	8	400%
	聖-	5	6	120%
	-皇-	18	11	61%
-詔-	4	1	25%	
小計	65	61	94%	
② 精神性を強調する語群	-忠-	15	12	80%
	-恩-	8	5	63%
	-臣-	5	5	100%
	恥	13	1	8%
	名誉	11	5	45%
	-武-	37	46	124%
	-勇-	24	14	58%
	勝	26	12	46%
	魂	12	19	158%
	精神	21	19	90%
小計	172	138	80%	
③ 死に関する語群	死	134	33	25%
	命	31	9	29%
	運命	5	5	100%
	覚悟	15	8	53%
	小計	185	55	30%
④ 自・他を対立を表す語群	-国-	107	64	60%
	日本	182	62	34%
	我-	87	46	53%
	敵	132	27	20%
	世界	37	34	92%
	小計	545	233	43%
合計		967	487	50%

戦時下のラジオドラマの内容分析—キーワードの相互関係に注目して—

したキーワード数の比率を見、これを「共起率」と名づけ、表2を作成した。共起率の高いものほど「戦争キーワード」同士が一緒に使われていることになる。

この表からわかることは第①群、第②群のキーワードは全体として共起率が高く（小計①群、94%、②群、80%）、プロパガンダ性が低い③群、④群は共起率が低いことである（小計③群、30%、④群、43%）。言い換えれば第①群のキーワードは他のキーワードとともに出現し、プロパガンダ性の高い文脈を作る。例えば例4のようである。

例4. 信長：#ⁱⁱⁱの如く乱れたる国々を平らげ 皇室の御尊厳を思い知らしめて日本を御稜威<オンミイヅ>の下に統一帰一せしむることを以って信長畢生<ヒッセイ>の仕事と致し上御一人の宸襟を安んじ参らする意を緊と定めましたる次第こゝに謹んで勅答におよびます。 <綸旨信長に降る>

同一発話中に7件も「戦争キーワード」が（下線を付した）出現している。

③群、④群のキーワード群は①群、②群に比べると小計において、その共起率は低いですが、個別に見ると「国」、「我」というような日常的によく使用される語彙でもその60%、53%が「戦争キーワード」とともに使用されている。つまり「国」、「我」という言葉の60%、53%が以下の例5、6のような使い方プロパガンダ性を持って発話され、キーワード間で強化しあっているということである。

例5. 解説：国産機が打立てたこの偉大な記録は、全日本の誇として忽ち全世界に放送されました。 <世紀の歌声>

例6. 河田：我々はこの大ニュースを全世界に送って、今や、津浦戦線に於ける支那軍勝利のデマを一掃してしまうのだ。

<世紀の歌声>

「国」、「我」、「日本」というようなやわらかな言葉でも、例5の「国産機」、「全日本の誇」、「全世界」というキーワードの流れ、例6「我」、「世界」という対立の図式の中で使用されることにより、強いプロパガンダ性を帯びる。

以上は同一発話内での「戦争キーワード」相互の強化の様相であるが、このような強化は発話相互間でも起こる。例えば、例3の「日本」は例5のように強化された「日本」、つまりプロパガンダ性を帯びた「全日本の誇」として使用された「日本」と深い関連性を持った「日本」なのである。結果、例3の「日本」は単純な自国の描写なのではなく、「誇りとする日本」という色彩を帯びてくる。このように「戦争キーワード」は発話内で、発話相互間で、そして今回は扱っていないがテキスト相互間で影響しあう。このような相互強化の関係は今回「戦争キーワード」とした語のみに起こることではなく、その他の語にも起こることである。

4-2. 共起のバリエーション

「戦争キーワード」相互の共起関係を観察するとある一定のキーワードとしか共起しないものと、様々なキーワードと共起する、共起のバリエーションの多いもの、守備範囲の広いものがあることに気づく。表3はあるキーワードがどのようなキーワードと共起したかを示したものである。共起すれば件数に関係なく「1」として記した。

個別的に見れば、「日本」は19種の「戦争キーワード」と共起し、守備範囲の広いキーワードであることがわかる。つまり「日本」は多くの「戦争キーワード」を強化し、また強化される語であることがわかる。この語は日常的に使用範囲が広く、そのプロパガンダ性は広く影響を及ぼすものと考えられる。また「日本」は日常的によく使用されやすく、母集団が大きく（182件）、このように多くの「戦争キーワード」と共起したとも言え

表3 共起のバリエーション

	①天皇に関する語群										②精神性を強調する語群								③死に関する語群				④自・他の対立を表す語群										
	天皇	陛下	大君	上御人	御稜威	宸襟	大御心	団体	勅	聖	皇	詔	忠	恩	臣	恥	名誉	武	勇	勝	魂	精神	死	命	運命	覚悟	自	日本	我	敵	世界	計	
①天皇に関する語群	天皇	1			1																												2
	陛下	1				1	1																										4
	大君																							1									3
	上御人					1	1			1	1																1	1					6
	御稜威	1	1		1	1				1	1																	1					7
	宸襟		1		1	1																						1					6
	大御心																																0
	団体																							1									1
	勅				1	1	1					1	1															1					8
	聖											1	1	1				1							1								6
-皇-				1	1	1					1						1	1								1	1	1	1			10	
-詔-																													1			1	
②精神性を強調する語群	-忠-									1	1	1																1	1	1			9
	-恩-		1	1								1					1											1					6
	-臣-			1									1											1									4
	恥																							1									1
	名誉																						1				1	1	1	1	1		5
	-武-										1	1					1	1	1	1	1		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	17
	-勇-											1											1					1	1	1			7
	勝																	1										1	1	1	1	1	6
	魂											1						1					1	1	1			1	1	1	1	1	10
	精神											1						1						1				1	1	1	1	1	8
③死に関する語群	死															1	1	1	1	1		1	1	1		1	1	1	1	1	1	12	
	命			1																			1	1	1		1	1	1	1	1	8	
	運命																1							1								5	
	覚悟												1										1	1	1	1						6	
④自・他の対立を表す語群	自				1																	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	14	
	日本				1	1	1						1				1	1	1	1	1	1	1	1	1		1	1	1	1	1	19	
	我																1	1	1	1	1	1	1	1	1		1	1	1	1	1	13	
	敵																	1	1	1	1	1	1	1	1		1	1	1	1	1	11	
	世界																	1	1	1	1	1	1	1	1		1	1	1	1	1	11	
計	2	4	3	6	7	6	0	1	8	6	10	1	9	6	4	1	5	17	7	6	10	8	12	8	5	6	14	19	13	11	11		

るのであるが、「-皇-」は母集団が小さい（18件）にもかかわらず、様々なキーワードと共起することがわかる（10種）。しかし全体的に見れば④群のキーワードは様々なキーワードと共起し、①群のキーワードは共起するものの範囲は限られている。

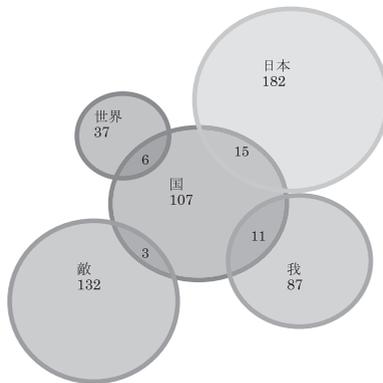
また第①群のキーワードは①群内で相互に共起していることが多い。ところが、②、③、④群のキーワードは群を飛び越えて関連しあっている。第②群のキーワードは精神性を表す語彙群であるが、前半の「忠」、「恩」、「臣」といったものは天皇に対する心の有り様を表現したものであり、補

助線____で示したように第①群のキーワードと親和性を示している。反対に第②群後半の「武」、「勇」、「勝」は戦いに対する心の有り様^{よう}であるが、第③群の死に関するキーワード、自・他の対立を示す日本、世界などとも、補助線_____で示したように親和性を示す。

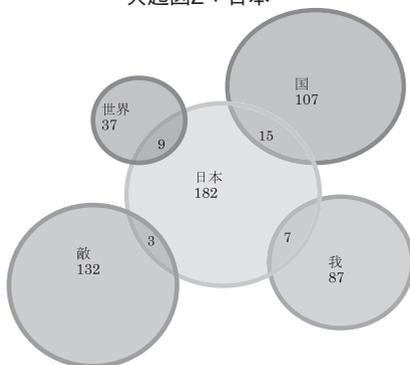
4-3. 第④群キーワードの相互共起数

前述のようにキーワードによって一定のキーワードと共起するものと多様なキーワードと共起するものがある。ここでは数多く出てきた第④群のキーワードを例に取り、相互的に共起する様を以下のような共起図を使い、視覚的に表す。図の円の大きさと数はそのキーワードの出現数を表し、円と円との重なり部分は共起部分であり、数は共起した件数を表す。

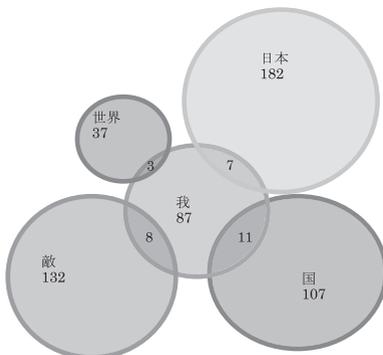
共起図1：国



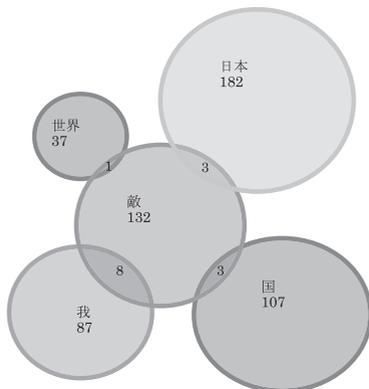
共起図2：日本



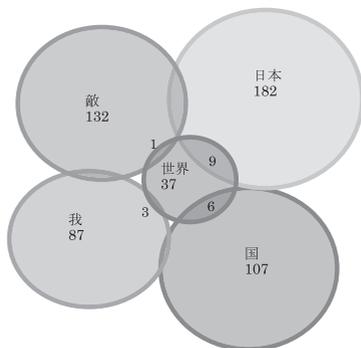
共起図3：我



共起図4：敵



共起図5：世界



個々の図からわかることは例えば「世界」（共起図5）のような言葉は数は少ないが、他のキーワード群と強い共起関係にあることである。37出現したうち半数以上、19件が他のキーワードと共起している。つまり、それらを結びつけ、それぞれの語と大変強い関連性を直接的に持っている。他方、共起図4を見ると「敵」は「日本」とそれほど強い共起性を持たず、共起数は3である。しかし間に「我」を介することで間接的に結びついているのである。共起図3：我を見るとその関連は明らかである。「日本」と「我」の共起数は7、「我」と「敵」の共起数は8である。「日本」→「我」→「敵」のつながりにおいて「日本」ということばは「日本」の「敵」、「我」らの「敵」を想起させるのである。このように「戦争キーワード」は直接的に強化しあうこともあるが、間に他の語を介することで間接的に強化しあうこともできるのである。共起図1：国を例にとると、「国」ということばは「日本」、「我」、「敵」、「世界」を関連語として想起させるのみならず、「国」を介することで「日本」と「我」は関連性の高い語として人々のこころの中に定着していくのである。

5. 結語

ラジオドラマは日常的なことばを使って構成されている。例えば「国」、

「日本」、「世界」というキーワードは日常語であり、戦時下に使われたスローガンよりプロパガンダ性は低く、プロパガンダ性に満ちた文脈を構成しにくい。しかしこれら語群は日常的であるがゆえにその意味範囲は広く、様々な言葉と結びついて教化ⁱⁱⁱを行っていた。

今回設定した「戦争キーワード」群は①群以外は竹山の設定した「キーシンボル」よりプロパガンダ性は弱く、日常的によく使用されるやわらかい語彙群である。しかし、これらは日常的に数多く使用されることにより、そのプロパガンダ性を少しずつ何回も繰り返して、浸透させた。また他の「戦争キーワード」と共起^{iv}しあうことにより、相互にプロパガンダ性を入れ込み、直接的、間接的にその語彙の持つ意味上のプロパガンダ性を強化し、広めた。これら強化は発話内、発話間、そして、テキスト間でも起こりうることである。このようにして、「戦争キーワード」は人々のところにプロパガンダを定着させていったのである。

参考文献

- 遠藤織枝他『戦時中の話しことば ラジオドラマの台本から』2004 ひつじ書房
大空社編『戦時下標語集』2000 大空社
竹山昭子『戦争と放送』1994 社会思想社
『ラジオの時代』2002 世界思想社
早川治子「『戦争キーワード』から見る戦時中のラジオドラマ」pp.162-194 遠藤織枝他『戦時中の話しことば ラジオドラマの台本から』2004 ひつじ書房

ⁱ 電子化資料はCD-ROMの形で『戦時中の話しことば』に付してある。

ⁱⁱ 以下例示されたものはすべて『戦時中の話しことば』に収録。

ⁱⁱⁱ < >内は電子化資料化されたドラマ名。

^{iv} その詳細、分析は早川（2004）を参照。

^v 「戦争キーワード」設定の詳細については2参照。

^{vi} 「共起」の定義については4.「共起」参照。

^{vii} 「#」印は音が聞きとれないことを表す。

^{viii} 戦時下のラジオ放送の目的が「教化」であることは昭和11年から12年の日本放送協会の標語に「国旗とラヂオは家毎に」とあり、「ラヂオは迅速正確な報道者」、「ラヂオは最良の家庭教師」、「ラヂオは最も簡易な慰安娯楽機関」とのコピーが付されている。このコピーは当時のラジオ放送の目的である「放送」、「教化」、「慰安」

の3点を明確に示している。本稿ではこの「教化」の一つがプロパガンダ、つまり人々を戦争に向かわせることであると考えている。この詳細は同じく早川(2004)を参照。